

日本行動分析学会ニュースレター

J-ABAニュース

2002年 冬号 No. 26(2月12日発行)

発行 日本行動分析学会 理事長 小野浩一
〒154-8525 東京都世田谷区駒沢1-23-1 駒澤大学文学部心理学研究室内
電子メール: j-aba@komazawa-u.ac.jp
電話: 03-3418-9303(心理学研究室事務室)
FAX: 03-3418-9126(日本行動分析学会事務局と明記して下さい)
ホームページアドレス: <http://behavior.nime.ac.jp/~behavior/>

年次大会情報

日本行動分析学会第20回年次大会準備委員会
委員長: 河嶋孝 事務局: 真邊一近

すでに第1号通信でお知らせいたしましたように、学会創立20周年の記念年次大会を2002年8月22日(木)～24日(土)に、日本大学生物資源科学部にて開催いたします。

研究発表(口頭発表およびポスターセッション)のほかに、記念講演、特別講演、記念シンポジウム、研究委員会企画シンポジウム、ワークショップ、懇親会、江ノ島水族館ツアーが予定されています。また、自主企画シンポジウムを1ないし2件、受け付けております。皆様、奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。年次大会についての詳細は第1号通信ならびに下記ホームページをご覧ください。

<http://homepage2.nifty.com/j-aba20/>

なお、第1号通信では口頭発表の時間が、1題につき20分(うち質疑応答10分)となっておりますが、正しくは1題につき30分(うち質疑応答10分)です。お詫びして訂正いたします。

シリーズ 現場に行く: 第6回 養護学校と地域の新たな連携に向けて

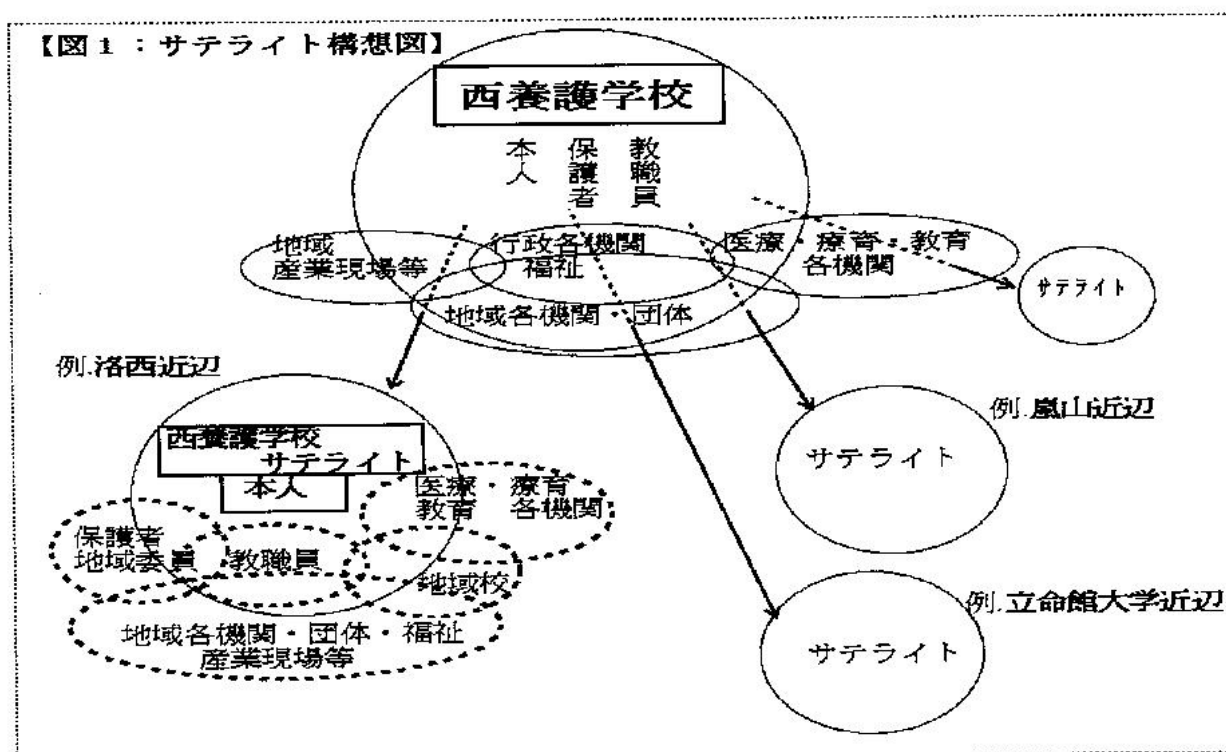
京都市におけるサテライト構想について
富家直樹(京都市立西養護学校)

京都市立西養護学校では、研究テーマを「より自立的な社会参加を目指す教育課程の再構造化」と設定し、5年間にわたって教育課程の見直しを行ってきた。「児童生徒の考えや主体性を尊重することから始めよう(児童生徒主体)」、「指導者からの発想である配慮や援助より、児童生徒の立場や視点での支援のあり方を探ろう(視座の転換)」という観点で見直してきた。児童生徒を、教育や介護を「される」存在としてではなく、自ら行動「する」存在として捉えようとする「新しい障害観」への発想の転換であり、「完全参加と平等」の実行を目指したものである。そのために、「個」を取り巻く周りの条件への対応、「できる状況づくり」を大切にしてきた。学校の中だけでの学習や行動を考えるのではなく、家庭や地域で生きていく児童生徒の姿をみつめ、社会で生きていくために必要な支援のあり方を探ってきた。一人一人の児童生徒が抱えている「こうありたい」、「こうしたい」という願いを大切にしながら、共に生活者として生きる力を育もうとしてきた。

この計画は、障害性(インペアメント)を越えて、個別の児童ひとりひとりについて、環境的要因にまで踏み込んで、個別の地域生活をどのように十全に成立させていくかという、IEPの本来的な実践を試みるものとも言える。そこでは、行動分析的な理念や方法論も密接に関係してくると思われ、このニュースレターにおいて、当計画の概要を紹介し、行動分析学会の会員諸君に意見やコメントを頂きたいと考えている。

1. サテライト構想について

学校という枠をこえて、私たちが児童生徒の居住地へ出かけて行き、「地域でともに生きる」ことをめざして、居住地域をベースにした学習を展開することを「サテライト構想」と名付けている。この取組で目指していることを、洛西地域を例に説明する。まず、地域で生きる一人の生活者としての視点で捉えた個別の指導計画を策定する。そして、洛西ニュータウン内にサテライト構想の拠点となる場所を設ける。指導者がその拠点に向かい、児童生徒も学校へ登校せずにそこへ登校してくる。そして、その場を中心にして、一人一人のニーズに応じた学習を展開する。サテライト構想は、決して本来保護者がされるべき事柄を、学校が肩代わりして行おうというものではない。ジョブコーチシステムの理念を基に、保護者や地域に働きかけ、居住地をベースにして、医療・行政・福祉・産業現場等の支援ネットワークの構築を目指す取組である。



2. 学習展開の流れ

- (1) 本人や保護者の願いをもとに、学習テーマを設定する。
 (2) 学習テーマに対して、①課題分析を行う。②ベースラインを確認する。③課題分析、ベースラインの修正を行う。④実行プログラムを作成し、学習計画を立てる。
 (3) 評価を行う。
 ①子どもの変容—子どもたちの日常がどう変わったのか。②保護者の変容—△△家の生活がどう変わったか、保護者の意識がどう変わったのか。③地域の変容—子どもたちが生きていきやすいように、地域がどう変わったのか。

3. 学習テーマの設定について—「4つの生きる力」と「4つの領域」—

本校でもまだ実践としては取り組めていないが、学習テーマを設定していく考え方について、現在、京都市が文部科学省教育研究開発学校の指定を受けて研究を進めている「4つの生きる力」と「4つの領域」との関連で説明する。

誰もが、「もっとやってみたい」と自分の生活世界を自ら広げられる“豊かな生活”、“生き甲斐の感じられる生活”を望んでいるはずである。障害のある子どもも私たちと同じ様に、それぞれの年齢段階で、自分の持てる力で、社会参加しながら自立している姿があるはずである。(社会参加と自立)そこで、障害のある子どもの『生きる力』を子どもの成長と発達の見点から、「4つの生きる力」として提案した。「4つの生きる力」は、自分なりの“生き方”を見つめ直すための視点である。

- ①『生命として生きる力』…人は誰もが一人一人異なる生命のリズムを持っている。
 ②『生活して生きる力』…人は誰もが他の皆と社会で生きる生活者である。
 ③『はたらいて生きる力』…人は誰もが自分の力で人の役に立つ存在である。
 ④『ともに生きる力』…人は人との間で人間になる。一人では生きていけない。

「4つの生きる力」の視点で捉え直した豊かな“生き方”を実現するために必要なことを考え、その支援のあり方を探るための分析の観点として「4つの領域」を導入した。「4つの

一人の生徒のケースを例示する。

【「4つの生きる力」の視点で“生き方”を見つめる】
 【生命として生きる力】
 【生活して生きる力】

- 家庭で保護者と一緒に生活したい
 ○もらった給料で、CDなどを買って
 楽しみたい。

【はたらいて生きる力】
 ○福祉施設で働きたい。
 ○通勤は、保護者の支援無しで一人で行きたい。

- 【ともに生きる力】
 ○好きな人と話をしたり、一緒にいたい。
 ○騒音や急な予定の変更が苦手なので、
 それへの対応を身につけたい。

【「彼の一人で市バスを利用する力」ということに関して、「4つの領域」で分析する】

【スキル】

- 自宅からバス停までは一人で往復できる
 ○何回か練習すれば自分が乗るべき市バスの号車に間違わずに乗れる。
 ○何回か練習すれば、降りるべきバス停で降車ボタンを押し、福祉乗車証を提示して降りられる。
 ○バスの時刻に合わせて出かけられる。

【意欲・主体性】

- 卒業後、福祉施設での就労を希望しており、保護者の支援無しで一人で市バスなどを利用して通勤したいと考えている。
 ○自分に任された仕事は確実に仕上げようとするなど、働く意欲は持っている
 ○CDレンタルや買い物で一人で行けるようになった。

【環境】

- 音に敏感で、バイクなどがそばを走ると耳をふさぎイライラする。
 ○予定を急に変更されると、対応できず混乱する。

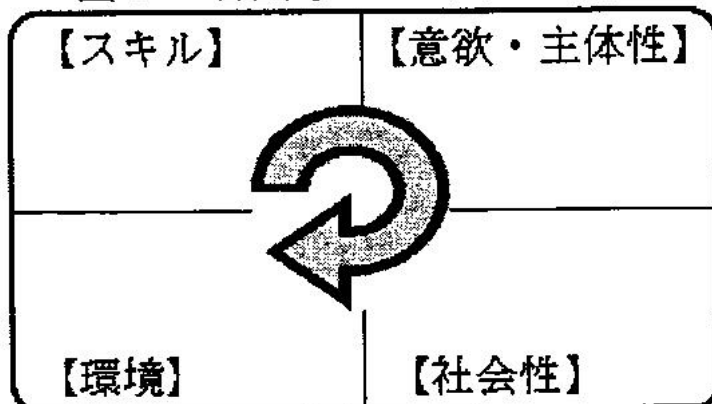
【社会性】

- 特定の大人や友達に興味を示し、自分から近づいていく。
 ○特定の大人に対して、笑顔で挨拶したり、「かっこいい」などと服装を褒める。
 ○交通ルールや市バス内でのマナーを守って乗車できる。

4. 右回りスパイラル構造の仮説について

「4つの領域」を用いて分析する際に、図2のような右回りスパイラル構造を仮説として設定した。スキルを「できる」、意欲・主体性を「しようとする」、社会性を「実践する」、環境を「環境をかえる」というように発展の段階としてみる。獲得しているスキルを使い、意欲を高めながら、より実践的にものごとに取り組むことで、今ある環境に自ら働きかけ、次のステージにのぞむといったものである。

図2：右回りスパイラル構造



前述の「一人で市バスに乗る力」というケースの場合、市バスを利用することに関してのスキル、意欲・主体性、社会性は一定確立されているが、アクシデントや他者からの予想外の介入への対応が心配である。そこで、短期目標（1年間の目標）を環境に位置づけ、次のように設定する。

「アクシデントや他者に介入されて自分が思っている通りにできない時、困っていることを「困っています」とそばにいる大人に伝える。

長期目標（3年間の目標）は、環境から一つ右に回ったスキルに位置づけて設定する。困った状況に置かれた時、「何に困っているのか」「どう助けてほしいのか」など、困っている内容と援助の方法を言葉で伝える。

目標は、行動目標として記述する。行動目標による記述では、指導者の行うべき状況作りや支援が記述され、「できない」のは本人が悪いのではなく、目標を達成するための状況作りや支援との関係が大切であることが明確になる。この例では、彼が「困っています」と言葉で伝えられるような状況をどのように作り、それをどう支援していくか、が大切になってくる。

5. 現状と課題

洛西地域に居住する6名の生徒を対象に、「地域でこうありたい」、「こうあってほしい」という視点で学習テーマを決め、応用行動分析を学びながら実践を進めている。ジョブコーチシステムの考え方も取り入れ、「生徒とともに活動する中で、必要な支援を探り、地域に対して援護を要請する」ということも考えてきた。現在、本人への直接的な支援内容と、地域へ要請する支援内容の整理を行い、学校における学習内容を整理しているところである。整理ができた段階で、誰が必要に応じて利用できる支援内容について、地域へ働きかけていきたいと考えている。

また、西京支部内の小・中学校へ、養護学校のセンター化、地域生活支援システムやネットワークについてのアンケート調査を行った。現在、その集約と考察を行っているところである。考察に基づき、養護学校で担うべきことがら、他機関で担っていただくことがら、連携して担うことがらを整理し、地域や関係諸機関へ働きかけていくつもりである。

公開講座公募のお知らせ

島宗理・浅野俊夫（企画委員会）

今年度からスタートした公募型の公開講座は、おかげさまで、たいへんな盛況です。つくば・徳島・北九州の三カ所で、参加者総数はのべ300人以上になりそうな勢いです。そこで、公開講座の企画は、来年度も、会員の皆さまから公募することになりました。

社会的な問題の解決に行動分析学の方法論をもって貢献するために、関連諸学界との連携を深めるため、さらに人間や動物の“こころ”を科学するマインドを青少年に育むために、地域密着型、会員発信型の企画を募集します。

「地域の教員に向けて応用行動分析学の講習会を開きたい」「保護者を対象としたセミナーを開きたい」「他学会と共催し、行動分析学を啓蒙するようなシンポジウムを企画したい」「地元の中／高校と共同で、青少年向けのセミナーや実習をしてみたい」など、どしどし応募して下さい。申請の〆切は3月31日（日）です。

詳しくは
simamune@naruto-u.ac.jp、
088-687-6596）まで。

リレー特集 私の好きなこの論文—その5—

大河内浩人（大阪教育大学）

昨年末、届いたばかりのJ-ABAニュース25号のリレーエッセイを読んでいたら、山本淳一先生の次の執筆者に私が指名されているのを発見しました。大変光栄に思いましたが、同時に困惑してしまいました。その数日前に中島定彦さんからJ-ABAニュースで私の研究室を紹介するよう依頼され、院生の原田君に、「書いて」とすぐにお願ひしていたからです。このことを中島さんに相談しましたら、あっさり、「どちらも書いて」というお返事でした。というわけで、恥ずかしながら、今回のニュースレターは、私の露出度が高くなっております。

1984年、千葉大学教育学部の4年生であった私は、文学部で開講されていた実森正子先生の「行動理論概論」を受講しました。この講義が私と行動分析との「出会い」になりました。今でも印象に残っているのは、受講生のひとりが心理学の初歩的なことを知らないことを知った先生が、「次の授業(隔週開講だったので、2週間)までに、何でもいいから心理学の教科書を一冊読んでください」と強い口調でその学生におっしゃったことです。「心理学を知っていないと、この講義は何の意味もなくなってしまいます。心理学を学んだ後に行動分析に触れてはじめて、目の前がぱっと開け、これだ！という体験ができるのです…。」

実森先生のこの予言は、少なくとも、私には的中しました。迷信行動、強化スケジュール、行動対比、頂点移動、errorless learning、ハトの注意…。聞くもの全てが新鮮な驚きに満ち満ちて、それまでに耳にしてきた「心理学」にどこかぬぐいがたい不信感というか異物感を常に感じていた私に、この講義は衝撃を与え続けました。そんな私にトドメを刺したのが、Galizio (1979) だったのです。

ハトやラットでは、強化スケジュールの値の大きさやスケジュール随伴性の

違いに反応が敏感に変化するのに対して、大学生など人間の成人では、このようなスケジュール制御がなかなか得られません。他方で、「こんなときにはこのように反応するんだよ」とか、「こんなふうに反応すると点やお金がもらえるよ」などと言われるとすぐに反応はそのような教示のとおりになります。こうした事実は、行動の本質的な制御変数は強化随伴性にあると考える行動分析家を少なからず減入らせていました。

Galizio (1979)は、そんな教示の効果もまた、強化随伴性によって制御されることを示したのです。確かに、教示が示している行動と随伴性に適応的な行動が一致しないときに、反応が教示に従ってしまうことはある。しかし、それは、「教示に従っていても被験者にとって不都合なことにならない」場合に限りであって、もし、教示に従っていたら点数が減っていくなどの嫌悪的な結果が伴うなら、被験者は教示ではなく随伴性に対応した反応をする。Galizioのこの発見は人間行動の実験的分析の歴史に偉大な足跡を残しています。

実森先生の授業でGalizio(1979)の話聞いたとき、私はすでに卒業論文の実験を終えていました(大河内・坂野,1985)。視覚刺激が呈示されてからの反応潜時がある基準より短ければ電気ショックは回避できて、そうでなければショックが呈示される事態で、試行開始から刺激呈示までの心拍率がショック回避基準の関数としてどうなるか、という実験を大学生を対象に行っていました。参考にしていた論文が1試行実験を採用していたので、私もそれになりました。1試行実験というと、被験者は実験的随伴性に全くさらされないわけで、先行条件の操作が決め手となります。どのぐらい回避するのが難しいかを知ってもらうために、例えば0.5秒という基準なら、0.5秒とはどのぐらいの長さなのかを、2つの刺激を0.5秒間隔で呈示して見せたり、電気ショックの感じもわかってもらうために、手首が屈曲するぐらいのショックを体験してもらったりして、実験条件に関する被験者の「受け取り方」を統制するために工夫しました。そのかいもあってか、それなりの結果も得られましたが、もうちょっとなんとかならないものだろうか、と自分の研究に不全感を抱いていたところで、これだけ先行条件を操作したのに、なお、「どのぐらい回避するのか難しいか」に関する試行前の予想に大きな個人差があり、その予想が実際の困難度と近似している被験者だけで比較すると条件差がよりはっきりあらわれたことも不満でした。私の実験操作からすり抜けてゆく被験者の「予想」、「受け取り方」といった自己教示のようなものが、実験外変数として被験者自身の心拍率とダンスをしながら、私をあざ笑っていたのです。

今にして思えば、Galizio(1979)は、そんな私に一筋の希望を与えてくれたのでしよう。一番日の短い季節の金曜の夕方、授業が終わって、もう暗くなったキャンパスを文学部から教育学部に移動し、研究室に戻ると、同級生が「全然結果が出ない」と嘆いていました。彼は特性不安が高い人と低い人の間で何がしか(忘れてしまいましたが)を比べていました。「そんなんじゃないんだ!」と心の中で叫びながら、私は、その日聞いたばかりのGalizioの実験を説明しようとしました。しかし、残念ながら、当時の私はGalizioの何がすこいのだかよくわからないまま、ただただ興奮していただけなので、思うように説明できません。それでも、心やさしい友人は、意味不明なことをまくし立てる私の話を少しでも理解しようと、熱心に耳を傾けてくれました。

あの日から、長いようでもあり、短いようでもある17年の月日が流れました。今日までの私の研究生活は、もちろん、楽しいことばかりではありませんでした。しかしながら、まがりなりにもこの世界にとどまっていたのは、科学としての心理学である実験的行動分析に出会い、いつの日か、Galizio(1979)のような研究をしたいという夢を抱いたからだと思います。数年前、私の論文(Okouchi, 1999)のレビューアーの中に、Galizioの名前を見つけたときの驚きと喜びは、皆さんにもおわかりいただけると思います。Galizio (1979)のもう一つの重要な発見は、「被験者の反応が教示ではなく随伴性に制御された後は、人間は随伴性に敏感になる」というものです。私の論文へのコメントの中で、Galizioはそれについて言及し、「私の知る限り、この現象を見出したのは、Galizio(1979)の他には、あなたのこの論文だけである」と書いていました。その一文を読んで、ささやかながら、私は何かに勝利したと感じました。

リレーのバトンは、筑波大学の野呂文行さんに渡したいと思います。以前から、行動療法学会の事務的なお仕事でお付き合いがありましたが、実のところ、彼の研究のことはあまり良く知らないので、そのあたりを簡単なところから教えていただけたらと思います。昨年の行動分析学会では、小学校教員へのコンサルテーションのお話を拝聴しましたが、グイグイと学校に入っていかれるところなど、なかなかやり手だなあ、と感服いたしました。では、よろしくお願いたします。

《文献》

- Galizio, M. (1979). Contingency-shaped and rule-governed behavior: Instructional control of human loss avoidance. Journal of the Experimental Analysis of Behavior, 31, 53-70.
- Okouchi, H. (1999). Instructions as discriminative stimuli. Journal of the Experimental Analysis of Behavior, 72, 205-214.
- 大河内浩人・坂野雄二 (1985). 状態不安喚起に及ぼす対処行動の影響 千葉大学教育学部研究紀要, 34(1), 55-67.

研究室紹介：大阪教育大学心理学教室大河内研究室

原田健介（大阪教育大学大学院）

1. 大阪教育大学とは・・・

大阪教育大学は、柏原キャンパスと天王寺キャンパスがあり、柏原キャンパスがメインキャンパスで、天王寺キャンパスは夜間学部（二部）のキャンパスとして機能しています。

柏原キャンパスは、大阪府と奈良県の境にあり、駅から大学へは歩いて約15分かかります。駅名は「大阪教育大学前」なのに、駅舎を出ても大学らしい建物は何一つ見えません。周囲は山、また山。登校途中は、約360段の階段を横目に、国立大学唯一の屋外エスカレーターで頂上の大学校舎を目指します。大学はこうした山の上にありますので、自然がいっぱいで、あまり見たことのない花や鳥を見ることが出来ます。こうした四季の変化を木々の移ろいや小鳥のさえずりといった目でも耳でも感じ取れることがわが大学の贅沢のように思われます。

2. 心理学教室は・・・

心理学教室は資料検索に最適な、付属図書館にほど近い0-5棟にあります。心理学教室のスタッフの専門領域は、教育大ということもあり、学習心理学、発達心理学、人格心理学、臨床心理学など多岐にわたっていきまして、教育活動の基礎となる内容から、実際の教育現場での心理的な問題を解決するための内容など、多彩な研究・教育をおこなっています。そのため先生方の中には付属学校の校長をされたことのある先生や、二部の天王寺キャンパスでも指導されている先生もおられます。我が大河内先生も柏原キャンパスで実験的行動分析の講義、そして天王寺キャンパスで応用行動分析の講義という形で学生を指導されています。

3. 大河内ゼミは・・・

ゼミの構成

ゼミ生は、大河内先生が二部所属でありますので、屋間の学生は11名（学部3回生3名・4回生5名、大学院M1：1名、M2：2名）で、二部の学生は5名（学部4回生2名、大学院M1：2名、M2：1名）です。私は屋間の学生ですので、以後の文章では屋間のゼミを中心に紹介していききたいと思います。

ゼミの特徴

ゼミでは毎週金曜日の昼休みに、学部（4回生）・院生のゼミ生全員でミーティングを行なっています。内容は、『学習の心理』（実森正子・中島定彦著、サイエンス社）や『初めての応用行動分析』（P. A. アルバート／A. C. トルマン著 佐久間徹／谷本二監訳、二瓶社）といった行動分析に関連した書物の一章ごとを各自が担当し、その章のquestionを作成して、それをもとにディスカッションすることを行なっています。普段、学部生と院生が接する機会はなかなかないのですが、このミーティングはそうした枠を越えたゼミ生同士のコミュニケーションを図る上で貴重なものとなっています。またゼミ生の行動分析に関する基本的な知識を確認することもできますので、まさに一石二鳥であるのでゼミ生の間では好評です。さらに、時には質問内容について先生の方から「いい質問だねえ」という言葉が発せられることがあり、それが、質問者にとっては質問への大きな正の強化子となり、回答者にとっては回答への動機づけを高めます。最近でも「弁別は人間にも動物にも形成されるが、形成のされ方に違いはあるのか？」という質問で盛り上がりゼミ生の中で盛んに議論されました。

ゼミ生の研究

ゼミ生の研究は大河内先生が人間行動の実験的分析を専攻されていることから、それに関連した研究を行なっています。大学生を被験者として、タッチパネルつきディスプレイを用いた行動実験を行うという形で研究しています。研究内容としては、行動履歴、刺激性制御に関する研究をしている学生が多く、昨年度の卒業論文でも「人間のオペラント行動における刺激般化」や「人間のスケジュールパフォーマンスに及ぼす遠隔履歴効果」といったことをテーマに研究を行なっていました。しかしながらそれら以外にも「自己報告」や「セルフコントロール」といった研究も行われており、先生の考えを踏まえつつ個人個人の興味関心に基づいた研究を行っていると言えます。

大河内先生とゼミ生

大河内先生は卒論・修論の指導等に他の先生以上に親身に実に熱心にご指導してくださいます。特に昨年は例年に比べお忙しかったにもかかわらず、学生の指導は欠かさずしていただき、ゼミ生はご迷惑をおかけしつつ大変お世話になりました。普段の大河内先生は先生が行くところ笑いが起こる！という感じで、大変ユーモアのある先生で大河内ゼミ生に限らず、他のゼミ生にもファンがいるほど人気があります。また、飲み会などでは行動分析についての議論から心理学全般の話、そして世間話までと、多岐にわたる話と名(迷?)言でゼミ生は魅了されます。こうした何でもオープンに話されるところは、ゼミ生から慕われる一因であると思われまふ。

歴代の大河内ゼミ生は女性が多かったと聞いているのですが、現在は男性9名・女性3名という具合になり、年々男性の割合が大きくなり先生は嘆いておられます。しかしながら、その分先生が思う存分?!に意見を言えるので、先ほどのミーティングや飲み会の席などでゼミ生同士が活発に意見を述べあうような、熱い側面がゼミの雰囲気として最近漂ってきているように思われます。

夜間ゼミ

二部の院生は3名全員が小学校または高校の男性教師で、児童や生徒の主張行動、読書行動、清掃行動の変容といった、実践的な研究に取り組んでいます。毎週水曜日の午後6時半ごろになると、各自の職場から天王寺キャンパスの大河内先生の研究室に集まってきて、この一週間のデータを検討し、翌週の方針を議論します。基本的な研究の方向性は大河内先生がイニシアチブをとられていますが、実践的な研究は先生の最も得意とされることではないこともあり、現場に立つ者の意見を院生達に求めることが多いです。夜間のゼミの後は例外なく休みなして大学院の授業に突入します。今学期は主張行動に関する論文を読み合っていますが、たびたび脱線し、先日などは、「わが国をどう立て直したらよいか？」について語り合っていました。

大河内先生を含めて20代後半から40代（時には50代、60代まで）の男達が夜9時を過ぎても天下国家を論じる姿は新橋の飲み屋に集うサラリーマンと何ら変わるところがありません。

4月からは、5回生に進級する（夜間学部は5年制）2名（男性1名女性1名）が卒業論文作成のためにこのゼミに加わります。彼らもまた、サラリーマンたちの渦に巻き込まれることでしょう。

最後に、このように我が大河内ゼミは、研究のみならず、ゼミの雰囲気そのものも先生を中心にまとまっていて、そのことが他のゼミにはない最大な特徴であるように思えます。私は学部3回から在籍しているのですが、大河内ゼミを選択し、行動分析を勉強していることを誇りに思っています。

国際会議報告： A B A ヴェニス国際会議

ヴェニス会議はかくして開かれた

杉山尚子（山脇学園短期大学）

2001年11月28日、“世界の”行動分析家が待ち望んでいた真の意味での“国際”会議がイタリアはヴェニス、サン・ジョルジョ・マッジョーレ島にあるベネディクト派修道院内で幕を開けた。ABAが1974年に設立されて以来、毎年年次大会を開いて本年は28回目を数える。そうであるのに、なぜこれが真の意味での初の国際会議なのか？ それは“国際”学会でありながら、3,526名の会員の実に87.3%が米国の諸機関に在籍し（ちなみに日本は1.0%で第5位である）、またこれまでは年次大会がことごとく米国内で開催されてきたからである（ただし2002年はトロント）。むろんこれは1974年の設立時は中西部行動分析学会と呼ばれた米国内部の地方学会が、1979年に突如として国際行動分析学会に名称変更になったという歴史に多くは由来することであろう。

もちろん、行動分析学は米国で生まれ、以後も米国内在籍の研究者によってリードされてきたのは確かであるし、また現在もおリードし続けているのも確かであろう。しかし、一方でフレッド・ケラーの永年にわたる尽力で（Keller, 1982）、ブラジルをはじめとする南米諸国には数千人にのぼる行動分析家がいるし、欧州やオセアニアも活動は盛んである。わが日本行動分析学会も会員数はすでに500名を超えている。その結果、これらの国々が国内に持つ組織はABAの中で次第に支部（Chapter）として登録されるようになってきたが、しかし、多くの支部の会員は国際組織としてのABAと、自分が属する国内の組織とのつながりを意識してはこなかった。それはわが国も同様で、1978年の第4回大会以降、私を含め、J-ABAの会員の誰かが欠かさず毎年年次大会に参加していたものの、それは「アメリカに行く」という感覚であり、国際学会のメンバーとして参加するという意識はなかったろう。事実、期間中に行われる米国以外の会員のための会議やポスター発表には、少なくとも1990年頃までは日本はまったく参加していなかったのである。当時はアメリカがすなわち国際社会だった。

しかし、こうした状況に異を唱え、真の意味での国際会議を望む動きも出てきた。その一つは、オーバーン大学のPeter Harzemがグアダハラ大学のEmilio Ribes-Inestaと共に1992年から始めた行動主義と行動科学の国際会議であらうし、もう一つは1993年からABAのExcecutive Directorに就任し、国際化を急速に推し進めたMaria Malottであらう。マリアは就任以来、年次大会の度に米国以外の参加者の代表を集めてビジネス会議を開催したり、各国の支部を整備したり、精力的にABAの国際化をはかった。その頂点は、わが国の佐藤方哉教授を米国人以外の初のABA会長にいただくことで、その理念を体現したことだろう。その結果、佐藤会長は在任中、国際化に関する3つの提言（ABAの役員に米国人以外の代表のポストをつくること、米国以外で学術会議を開くこと、国際化推進のためのグラントをつくること）を行い、この度のヴェニス会議はその一つの実現だったのである。

9月の同時多発テロによる参加者減少が危ぶまれたものの、3日間の会議には24カ国から264名の参加者を得、106件のイベントが行われた。閉会のセレモニーでは各国の代表が一言づつスピーチを求められるという、毎年5月の年次大会では考えられないようなことも行われた。日本からも学生会員3名を含め12名参加し、気を吐いた。マリアの企画力と実行力と組織力とで、まずは盛会裡に第1回の“国際”会議は幕を閉じた。

しかし、すべてはこれからである。マリア・マロットの強力なイニシアティブで実現した国際会議は今後、3年後の2004年に第2回を行い、以後2年ごとに開催予定という。この会議は、ConferenceであってConventionではない。ものごとは、ある個人の強力なリーダーシップで始まることが少なくない。しかし、これを継続させていくには、別の伴件性も必要である。1984年以来ABAに身を置く（国際）会員としても、またマリア・マロットの親しい友人としても、今後とも行動の主体者にも環境要因にもなっていくつもりである。

《文献》

- Keller, F.S. (1982). Pedagogue's progress. TRI Publications.

ヴェネツィア報告

金子尚弘（白梅学園短期大学）

昨年11月28日から30日の3日間、イタリアはヴェニス、最近の日本でいうヴェネツィアで開催された行動分析学会の海外大会に参加した感想を、一参加者の立場から報告させていただきます。

ポスターの申し込み手続きも慌しく済ませた後、11月になるまで旅の手配をしなかったのも、インターネットで航空券、ホテル、列車の予約が整ったのは出発間際といったものの如く、これで済んでしまうものだからなかなか行動は変わりません。航空券の都合からローマの後は、フィレンツェ、ヴェネツィアへと列車で周ることにして、36年振りのヨーロッパ、初めてのイタリアへと成田を出発しました。途中は省略することとして、ヴェネツィアについて早速ヴァポレット（水上バス）の3日券を買い、まずはホテルのあるサン・マルコ広場近くの船着場まで大運河をのんびりと南下。降りた同じ棧橋からサン・ジョルジョ・マッジョーレ島にある唯一の施設であるサン・ジョルジョ・マッジョーレ教会の会場までを往復することになります。60人は乗れるであろう水上バスは予想したよりも機敏で、乗り降りも陸上を走るバスのようなタッチアンドゴーで、700メートル程先の会場までをそれこそ5分で行き来できる便利さです。会場の教会は僧院独特の静けさの中に包まれていて、中庭を囲んだ回廊からそれぞれの部屋に行くことができます。教会の奥の敷地には、島特有な見通しの良い自然な佇まいを残した道が続き、途中には昼食やポスター会場となる集会場があり、対岸を見渡すガラス張りの明るい広間でコーヒープレイクを取ることができるといった按配です。

ペーパーセッションは並べられた椅子に較べると参加者の数は多くはなかったように思いますが、発表に続く熱心な参加者の質問と、質問者同士の意見交換、そして拍手で終わるといったパターンは共通していたように思います。夕方5時からのポスター発表には準備時間が充分にあるので、それぞれ持ち込んだA0サイズのそれこそポスターや、数枚の紙を並べた従来型、中にはA4サイズ1枚という人もおりました。私はA3サイズ数枚を使ったので、用意されていた画鋏だけではなく、持ち込んだのり・両面テープといった小道具が役立ちました。発表時間になると三々五々集まり始め、熱心に質問・討論・持論が展開されな

かなか盛況でした。ペーパーセッションでの発表より取っ付きやすく、大会にも溶け込み易いと思います。

今回は大会が世界屈指の観光地ともいえるところでもあなっは、レブシヨンのヘーに参加者
 が多かった。小運河と路地が織り込まれた「ツイエ」は迷路を歩かなくて、そのまま
 ラットリアー、バーガに強化されるようには対応できない。でも、温かい
 析学は参加者が常に強化されるようには対応できない。でも、温かい

歓迎レセプションを盛り上げるマロット教授のスライドショーも素晴らしく、時の経つを忘れるくらいでした。集会場でのランチも上々で、夜のバーでのイタリア風の気さくなサービスも気持ちの良いものでした。

最終日の早朝はアジアからの参加者によるビジネスミティングがありました。佐藤先生で、小野先生の活躍のもと、今後ますます多くっている日本人、またアジアから思われる目と時でた。是非これからの大会には挙って参加、次には自然に大量参加と目標を掲げましょう。

ヴェニス会議に参加して

石井拓（慶應義塾大学大学院）

私は主に実験的研究の発表に出席し、自分も選択行動についてのポスター発表(連名発表)を行いました。今回の国際大会には実験的研究に携わっている研究者があまり多く参加していなかったようですが、様々な国から来た者同士で共通のトピックについてすぐに理解しあえたのは得がたい経験でした。これは、少なくとも基礎研究において、様々な国の研究者が共通のバリエーションに従って研究を行っていることを示しているのかもしれません。シンポジウム等で取り上げられたトピックをみると、選択行動、罰の効果、強化履歴、刺激等価性、行動経済学、シェイピング等々、既に多くの研究が積み重ねられているものも多かつたようで、これも実験的研究が成熟してきた表れのような気がします。しかし、同時に目新しいに欠ける印象も受けました。2001年5月にニュートンズで開かれたABAの年次大会やSQAB (Society for the Quantitative Analyses of Behavior) では、安定した行動ばかりではなく行動が変化する過程を取り扱おうとする試みが米国の影響力ある研究者たちの間で盛り上がっているようでしたが、今回の国際大会を見る限りそれはまだ広まっていないようでした。これから自分の研究を確立していかなければならない大学院生である私としては、今後この試みが国際的に盛り上がるのを見せるのか、それとも別のブレイクスルーが提案されるのが興味深い点になると思います。

ABA International Development Grantのお知らせ

杉山尚子（国際担当常任理事）

日本行動分析学会は、本年8月開催の第20回年次大会を記念して、今後の活動を国内のみならずアジアに展開していくために、年次大会の目玉プログラムとして「アジア・シンポジウム」を企画しました。これは、とかく米国に向きがちな近隣諸国というその情報交換をすめ、新しい教育や研究の方向性を探ることを目的とするものです。このために、中国、韓国、台湾から第一線の研究者をお招きし、まず現状と問題提起を行なっていく予定です。

この企画に対し、2000年度より開設されたABAのInternational Development Grantを申請したところ、12月21日付けをもって、1,000ドルのグラントが交付される名誉を得ましたので、会員の皆様に報告いたします。なお、申請書ならびに採用通知書を次ページに掲載します。

グラント申請企画書

(一部抜粋)

On August 22-24 of 2002, The Japanese Association for Behavior Analysis (Japanese ABA) will proudly hold its 20th annual convention at Nihon University in Fujisawa. To celebrate the 20th anniversary meeting, Japanese ABA is planning a special symposium, inviting leading behavior analysts from Asian countries, to discuss the history, present, and future of behavior analysis in Asia. The purpose of the symposium is twofold: to disseminate behavior analysis in Asian countries and to establish an Asian league of behavior analysis in the future. The International Development Grant will be utilized to support the inclusion of these invited speakers. <中略>

At the 20th anniversary meeting, the Japanese ABA decided to make a next step to expand activities not only nationally but also internationally. Although each A

<後略>

採用通知書
n

Dear Naoko,

Congratulations! It is an honor to inform you on behalf of the Board of Directors of the Society for the Advancement for Behavior Analysis (SABA) that the Japanese Association for Behavior Analysis will receive a 2001 SABA International Development Grant to support the participation of leading Asian behavior analysts in Japanese ABA's 20th anniversary convention.

Board members were impressed with this project and the dedication of Japanese ABA to developing behavior analysis in the region. We appreciated the significance of

<後略>

Sincerely,

Maria E. Malott, Ph.D.
Secretary Treasurer, ABA

公開講座レポートfrom徳島

久保治子（徳島県立国府養護学校）

徳島での公開講座は、『発達障害者の“ことば”にならない“ことば”を理解して支援する一問題行動を減らすためのコミュニケーション訓練—』と題し、講師に平澤紀子先生（西南女学院大学）をお迎えして、2001年12月15日、徳島県郷土文化会館にて開催されました。

参加者は142名で、所属別に見ると、聾・養護学校教職員が62名、福祉施設職員が46名（内訳：就学前・児童施設11名、成人施設35名）、小・中学校の障害児学級教員が22名、保育所の保育士が5名、保護者5名、市役所職員1名、病院勤務の心理士1名でした。

徳島での公開講座は、徳島障害児教育ふぉ～らむと共催で行われました。この組織の代表は、徳島県立ひのみね養護学校教諭で二フティの障害児教育フォーラムマネージャーである島 治伸氏です。平成8年の発足以来、会員が経費を少しずつ負担することで、高い交通費を出して遠隔地へ行かなくても、講師の先生をお呼びして、ここ徳島で障害児の療育や教育に関する研修ができる機会を提供してきました。ふぉ～らむのメンバーの中で、問題行動の理解や手だてについての勉強がしたい、という声があったところに、日本行動分析学会の公開講座の公募は、資金面での補助もいただけることで、とてもありがたいことでした。

平澤先生の講演は、最近、学会から出版された『ことばと行動—言語の基礎から臨床まで—』にも執筆されている、機能的アセスメントや分析について、解説や事例などをふんだんに取り入れた、パワーポイントによるわかり易いお話でした。パワーポイントの画面を記載した配布資料の他にも、事例のビデオがあり、講演後に参加者にお願したアンケートにも「事例ビデオで（子どもの）変化の段階が、よく分かった」「学校の場面と家庭の場面のビデオがありよかった」という記述が多く見られました。

また、アンケートには、「先生の話し方が、自然にゆっくりしみ込むようにはいってきた」「演者の声質・音量がよくとても聴きやすかった」との記述も見られました。「現場を経験されたことのある先生のお話であったので、学問的、理論的だけでなく良かったです。」「すぐにも取り組んでみようと思える内容だった」との感想もありました。

同じくアンケートの「今回の公開講座でわかりにくかった点、疑問に残った点などがあればお書き下さい」という項目には、「ABC分析について講義の中であまり理解できなかったので解りにくかったが、最後の説明でわかった」という記述がありました。

他にも、「問題行動というのは本人にとって訴えであると言うことは分かっているつもりであったが、日常の中では忘れてしまっている事もあるので、このような講座に参加することにより気持ちを引き締めて利用者に接するきっかけになる」という意見があり、公開講座を実施してよかったと感じました。

公開講座終了後の打ち上げでは、平澤先生が大の踊り好きであることが発覚しました。徳島に来て下さったのも、阿波踊りに興味があつたからだそうです。阿波踊りでは、一つつのグループが“連”という集団で町中を踊り歩きます。今度は、ぜひ夏に来ていただいて、ABA連（あばれん）を結成したいですねと盛り上がりしました。

第6回行動主義と行動科学の国際会議

The 6th International Congress of Behaviorism and the Sciences of Behavior
杉山尚子（国際担当常任理事）

1992年に米国オーバーン大学のPeter Harzem教授と墨国グアダラハラ大学のEmilio Ribes-Inesta教授によって発足したこの会議も、第6回を迎えることとなりました（第3回は1996年に横浜プリンスホテルにて開催）。行動分析学はもちろん、ABA Internationalという国際組織を持ち、毎年学術大会を行っていますが、近年はその参加者は2,700名を超え、規模の増大によるメリットはもちろんあるものの、徹底的な討論ができなかったり、会場が広すぎてなかなかお目当ての研究者に巡り合えなかったりというデメリットも目立つようになってきました。そこで、この会議は、もう一度原点に立ち返り、とくに最近応用に押され気味の基礎や概念的の研究を盛り上げようとの趣旨で、米国主導のABA（国際組織でありながら、米国以外で学術大会を開催するのは28回目の今年が初めてです）ではなかなか出番の少ないヨーロッパ、アジア、南米を会場として2年ごとに開催されてきました。

今回はじめて米国内で行われます（これは、本来の趣旨に反するのではないかと思います。オセアニア・アフリカを除いて一巡したのでよいのではないのでしょうか）。日本の大学の学事スケジュールから見て参加しにくい時期ですが、奮ってのご参加をご案内申し上げます。基礎研究や概念的研究に力を入れているものの、もちろん応用研究も歓迎されます。ABAより小規模なので、お目当ての研究者と親しく話すチャンスが広がるでしょう。なお、格安で信頼で

きる旅行代理店の紹介を希望される方、米国内の大学や研究所を訪問するための紹介を希望される方は、杉山 (QWL05617@nifty.ne.jp) までご連絡下さい。

会期：2002年9月18日～21日（4日間）
会場：米国アラバマ州オーバーン大学
アトランタ空港よりシャトルバスあり
公用語：英語・スペイン語
発表形式：招待講演（60分）・口頭発表（20分）・シンポジウム（120分）・パネルディスカッション（60分）・ポスター発表
宿泊案内：観光学部をもつ同大学内のホテル
（\$86／室、非常に快適なところです）
参加費
5月31日以前 一般 \$120 ／ 学生 \$60
6月1日以降 一般 \$160 ／ 学生 \$80
発表申込締切：2002年6月1日
宿泊申込締切：2002年8月18日

* 発表を申し込む方は、タイトル・発表者氏名・発表者所属・アブストラクト（100語以内）・発表に使用する機器・発表形式の種別、についての情報を添付ファイル（ワード形式）

Prof. Peter Harzem
Dept. of Psychology, Auburn University
AL 36849-5214, USA
E-mail: congres@auburn.edu
(sはダブリませんのでご注意)
[http://www.auburn.edu/
international congress on behaviorism](http://www.auburn.edu/international_congress_on_behaviorism)

なお、極東地区の実行委員は以下の通りですので、いつでもお問い合わせ下さい。
佐藤方哉（帝京大）・杉山尚子（山脇学園短大）・Wang Ta-Yen (Taiwan)・Wei Jane (Taiwan)・Tzu-Ying Lee (Taiwan)

公開講座のお知らせ 『行動障害の理解と予防』

主 催：北九州発達障害ネット・日本行動分析学会・
西南女学院大学保健福祉学部附属保健福祉学研究所
後 援：北九州市手をつなぐ育成会・北九州市自閉症児者の未来を考える会
日時：2002年3月21日（木）10:00～15:00
（9:30開場）
会場：西南女学院大学206教室
（福岡県北九州市小倉北区井堀1-3-5）
講師：園山繁樹先生（筑波大学）
野口幸弘先生（大野すばる園）
参加費：1000円（当日、受付でお支払い下さい）
定員：100名（3月15日までに下記へ申込）
連絡先：〒803-0835
福岡県北九州市小倉北区井堀1-3-5
西南女学院大学平澤研究室
FAX: 093-583-5035
E-mail: noriko-1@kb3.so-net.ne.jp
<http://ww12.u-page.so-net.ne.jp/kb3/noriko-1/>

J - A B A ニュース編集部

書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、学会に対する提案や批判、求人・求職情報、イベントや企画の案内など、さまざまな記事を募集しています。原稿はテキストファイルの形式で電子メールかフロッピー（DOS）により、以下の編集部までお送り下さい。なお、掲載された記事の著作権は日本行動分析学会に属し、ホームページでの公開を原則にしています。メールアドレスなど、一般公開を望まない情報がある場合には、事前に編集部までご連絡下さい（第26号担当：中島定彦）。

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1 立命館大学文学部 望月昭

TEL & FAX : 075-466-3189 E-mail :
mochi@lt.ritsumei.ac.jp

